

らじかる



第2号

「女性解放の悲劇」

出版準備進む

イデア出版では、最初の出版活動として、エマ・ゴールドマンをとりあげました。現在のウーマン・リブの先人として、エマは60年前に女性解放のために闘い、その問題提起は今もなおわれわれにせまってくるものがあります。アメリカ、さらにはロシア革命においてアナキストとして活動したエマは、理論の人というよりは気性の人であり、その強烈な個性は、良きにつけ悪きにつけ、アナキストの一原点として、われわれが自分をぶつけてみたくなる存在です。

この「女性解放の悲劇」は、エマ・ゴールドマンのエッセイ・自伝・評論を集めておりこの書によって、彼女の激しさ、情熱、民衆を愛する心、そして思想が、充分読者に伝わってくるでしょう。なお、現在製版中で、発売は6月の終りか、7月の初め頃になる予定です。

直感アナキズム

西塔昌弘

禅の公案に、「世尊、昔、靈山会上に在って、花を拈じて衆に示す。是の時衆皆な黙然たり。惟だ迦葉尊者のみ破顔微笑す。世尊云く、『吾に正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙の法門有り。不立文字、教外別伝、摩訶迦葉に付嘱す』』というのがある。判りやすく言えば、ある日、釈迦が来会の僧たちの前で

一枝の花を取って人々に示すと、みな黙ってしまったが、ただ迦葉尊者だけがそれを見てにっこりと微笑した。すると世尊が、私には真の法門がある。いま、それを言句文字によらず、經典の教え以外のしかたで、迦葉尊者にゆだねるだろう、といったというのがここでの釈迦と迦葉との関係は、互いに何かを理解し合ったということであり、言葉を通じてではなく、直感的に、しかも、おそらくそれは二人にとって初めて経験する関係だったろう。そして、この関係の前提として、釈迦の教えというのが、言葉によってではなく、直感によって理解されるものだということがある。それ故、それを直感的に理解した者は、互いに直感的に相手を理解する。この場合、悟りとは、仏教でいう法の、直感的理解が行動と結びついた時のことと言っていい。すなわち、釈迦が花を取って、示したとき、それはあくまでそのような直感的理解と結びついた行動であり、それに対する迦葉の微笑は、それによって、彼が法の直感的理解と行動（笑うという）とが初めて結びついたことを示したのだ。ここでいいかかったこととは直感によってのみ理解されるものは、直感によってのみ伝えられ、しかもそれは、きわめて直接的な、歪曲されることのない伝達だということである。道元は、禅というものが、釈迦から迦葉、さらに達磨を通して如浄から道元へと、綿々として続いてきたことに感激しているけれど、それは万世一系の天皇などというキャッチフレーズに感激している人間どもとは、月とスッポンほどにも違う感情なのであって、それは何よりも道元と彼の師である如浄との関係が直接的であったということであり、さらにその直接性が、如浄とその先師との関係であり、さらにその先師と……

釈迦まで、その直接性が連がっていることによって、実は道元と釈迦がそのまま直接関係し合っている、ということへの感激なのだ。

アナキズムを他の思想のアナロジーとして説明することは、間違った方法だとは思っているが、現在のアナキズムの水準からいえば、禪がきわめて多くのものをアナキズムに与えてくれるような気がして、前述の公案を引用したのだが、アナキズムも一種の言葉では理解できない思想ではないかという気がするのだ。例えば、アナキズムとは何よりも心情の反逆であると言うとき、それはアナキズムを言葉ではなく、直感により理解すべきものであるということを示している。そして、我々は各人の思想性をも、言葉よりは直感的によく判断できる。このことは、アナキストの思想形式が直感と行動の結合によって成し遂げられるべきことを示している。ただ、言葉もまた禪における公案のように一定の有効性を持つだろう。

アナキストが直感的にその思想性を深化するとき、アナーキーへと一步近づく。そこでは、言葉を媒介とすることなく、互いに存在するだけで理解し合うだろうし、それは各人による各人の統治というアナーキーへの前進だ。さらに、直感的思想性の深化は、アナキスト相互の理解を直感的に行うことによってアナキズム運動にスピード化をもたらし、その分だけ力をアップさせるだろう。又、それは権力によるアナキズム運動の分析を不可能にし、敵を知り、己れを知れば百戦危うからず、という言葉があるけれど、敵に己れを知られないということは、それだけアナキズム運動が権力に対し優位に立つということになる。そして、口と思想性が一致しないなどというアナキストも、しだいに運動から排除されていくから、アナキズム運動内部の混乱も無くなり、連合をそれだけ集中化することが

できる。

アナキズムにおいて直感性が大事にされるのは、アナキストとしての思想性が、その人の全人格と結びついたものだからだろう。この直感的思想性は、だからこそ日常において磨き上げ、研ぎ澄まされなければならない。

エマ・ゴールドマンと 婦人参政権

はしもと・よしはる



先日テレビで〈人に歴史あり〉をみた。婦選の長老市川房枝女史の話で、女史の苦労話もさることながら、重要な点は、日本女性の婦人参政権は、普通マッカーサ元帥が与えたといわれるが、実はボツダム宣言によるものだ。けどそれでは余りに日本の女性が可哀いそうで、わたし達がそれ以前でも運動していたのだから、わたし達が勝ち取ったと言えなくもないのです、とあった。少々歯切れの悪い話だ。婦人参政権が女性によって勝ち取られたのではないことは、普選を今日のような形で男性が勝ち取ったのではないのと同じで、選挙権が多額納税者に限られていた時代からすれば隔世の感がある。

だが知っておくべきは、そうした貴重な選

挙権でも、行使の段階ですでに汚されるのは米国のウォーターゲート事件で明らかである。エマは言う。女性が選挙権をもち、また政治家に選ばれたとして、この政治がよくなるでしょうか。女性の性質である潔べき感だけでは、政治の泥沼は浄化できない。むしろ女性は、男性に悪いことをさせないようにチェックすべきだ…としている。

彼女はアナーキストだから反選挙なのだ。ではそれに代る何かがあるだろうか。反議会主義の言論は許せない。そういう反論も聞かれよう。

アナーキストは投票で政治家を選ぶのは反対する。その政治家が四年間、たとえ民情を視察して呉れ、民意をとりあげて呉れても、大低実施は時期遅れになったり、政治的術策で処理されるので反対なのだ。

直接民主主義は、非常にいいものだ。けどこう忙がしくてはいちいち政治にタッチできない。だから代表を選んで政治にあたらせる間接民主主義こそ人間の考えだした知恵というものだ。大意ではそういう意見を中江兆民先生が紹介していた。大方ルソーあたりの説だろう。

アナーキズムは、そうじやなくて、例えば1921年以前のソヴェトとかサンジカとか、現代の市民運動のような、人びとに開かれた組織を歓迎し、参加するのであって、『政治局』だけはご免蒙りたいと思うのである。

なぜだろうか。『政治局』は人民に命令したがる。例えばそれが民主的中央集権制をタテマエにしても、上から下へ、下から上への方向性をもち、決して横へのつながりにならないからである。エマは体験的にそう語っている。

五感へ

しかし、住みずらい世の中である。街には軒並高層ビルデングが立ち、歩いていても気持はよくないし、道路も歩道も4～5年前から急にアスファルトで固められ息苦しい感じである。そして、なによりも五感全体にわた

イデア出版案内

E・Gは特に深刻だとか特異な思想家という訳にはいかない。けれど彼女は女性、子供の問題を政治的視野の中心にもちこんだことで重要だ。言うまでもなく、フェミニズムこそ、現代で、彼女が再び親しまれる風潮をもたらしたのだが彼女は半世紀以上を明析に首尾一貫して勇気をもって生き抜いたのである。だから読むに価するのだ。……シュールマン夫人は1970年8月ニューヨークでのフェミニストのデモで歌われた言葉を報告している。

エマは1910年代にそれを語った、
今、わたし達が再びそれを語るのだ！
—ニコラス・ウォルターの書評より—

女性解放の悲劇

- ▶わが生涯を生きる◀より
カーネギー製鋼所のスト
ホームステッドの惨劇
金を作るのに街の女となる
サーシャ(A・ベルクマン)フリックを襲撃
売春宿に落着く
モストを鞭打つ—他—
- ▶エッセイ◀
アナーキズム
少数者と多数者
女性解放の悲劇
結婚と愛
フランススコフエラーと近代学校
女性参政権
愛国心
- ▶評言◀
ルイズミッシェルの印象
P・クロボトキンの印象
クロンシュタットの印象—他—
- ▶ロシアに於けるわたしの幻滅◀より
裏切られた革命

印刷・出版

バルカン社

TEL 03-354-1039

って季節感が感じられない。

最近読んだ新聞に「教科書の中の農民軽視」という小文があった。その中で筆者は、民話の中にある農民の心の内側からの叫び＝願望に対して、現在の教科書の表面的な記述による不毛さを訴えている。「かちかち山」を引用する中で、毎日畑へ行って作物を植えるのだけれどもそのたびに山のたぬきに荒らされるが、また次の日も種をまく「……ひとつぶは千つぶに、ふたつぶは万つぶに……」。

私自身、生まれて育ったところが山あいの村で家でもわずかであるが農業をやっていたので、わかる感じがする。例えば、種をまく時秋の収穫をどれ程願っているのか、また、その為に夏の暑い中一本一本雑草を取っていくあの時、「きつといつかは…」と想いながら汗を流しているのである。このように、農民の願いや作物を作る喜びなり誇りは、現在の教科書の中では、工業が進出する中で、農業は表面的にあたかも自動的に全てが生産できるような記述になっているのである。私達は、小さい時土にまみれ日本の四季を体の全ての感覚で感じ取ってきた。そして現在も街の中で、わずかな花や太陽や風の変化で感じようとする。しかし、幼い時から土を奪われてしまって、接する機会が日常的でなくなっている人間が、これから育っていき、表面的な宮中で教わるような農業学（話はちよつとずれるが、天皇一家の容貌はいかにも平面的なもので、ちよつと異常性を感じるけど、人相学的にはどうなんだろう。結局宮中生産学の結晶がああ姿型となって表われるのだろうか）を学ぶのでは、その生産過程にかかわる人間の情熱なりロマンが感じられない。私は思う、全て科学的という名のつく思想が取り残してきたものを。そして科学的何々によって切り捨てられ、殺されていった人達のことを。

私は、実体験を絶対化するわけではない。ただ、自分の価値感などに加わる体験的な感覚（それは学校教育、家庭教育、社会一般の影響によって培われたもの）を無視して、自分が望むものは構築できないと思うだけだ。だから「私が一番信じるのは私の感覚で一番

信じられないのも私の感覚である。」という形で設定される問題を日常的に問い続けようとするわけだ。特に知らないうちに宿ってしまう感覚が、取り返しのつかないものになる。例をあげるまでもなく、他民族の虐殺、琉球処分など、結局は一人一人が作り上げた感覚の所産に過ぎない。しかも、一層恐ろしいことは、それをいろいろな思想で装い、装いを主軸に物事の判断をやっていくことである。私はそうしたくない。

街にはニューファッション、ニューセンスという形で作りあげられた服装、歌が、毎日これでもか、これでもか、といった調子で耳に眼に入ってくる。作った側から受け入れる側へ、そして逆の回路でまた戻って、新しいものができて循環する。色彩豊かなメーデのデモ行進者達と、彼らの会社の下請、孫請そのまた下請の〇〇会社社長と呼ばれる人達と、どちらの生活が楽かなどと考えているその従業員。とにかく、頭の先と尻尾があつてあとはどうもわからない。

—相京—

後 記

「らじかる」創刊号のはしもと氏論文中、あたかもそれが、イデア出版の「現状の認識」であるかのように読み取れる箇所がありますが、論文はあくまでもはしもと氏個人の認識であって、あのような現状の認識を持って、はしもと氏がイデア出版へ参加するということです。（流）

らじかる 第2号

発行日・1973年6月1日

編集人・西塔昌弘

発行人・はしもとよしはる

発行所・イデア出版

東京都新宿区東大久保1-464 松喜ビル

TEL 03-354-1039

年間購読料 300円